

立命館百年史紀要 第14号 抜刷 二〇〇六・三

特別寄稿

私の父と立命館中学

南部陽一郎

私の父と立命館中学

南部陽一郎

私と立命館との関係は一〇年ほどまえ、理工学部で客員教授として講演などをさせていただいたときに始まる。しかし実は私の父も若いころ立命館中学に在学したことがあると聞かされていたので、立命館という名前にはなんとなく親しみを覚えていた。今回はからずも、その昔のいきさつについて語る機会を与えていただいたことは私としても非常にうれしい。

父、吉郎は一八九三年福井市の仏壇屋の長男として生まれたが、後に述べるように家を捨てて独立してしまった。福井を含む北陸地方は仏教王国といわれていて、嘗て蓮如上人が布教に努め、一向一揆が大名たちに反抗して一〇〇年間勢力を振るった地方である。そのような革新的な時代は遠い過去のことだが、私の小学生時代でも、毎月寺の檀家たちが持ち回りで坊さんと呼んで「講」を立てる慣わしであった。同級生たちはお互いにお経を暗誦できることを自慢しあって、家に仏壇も神棚もない私を当惑させた。

私の祖父の店は道吉といい、西本願寺の近くにであった。北陸でもかなり有名な仏具屋だったらしく、「越前の国、道吉」とだけで郵便が届いたということである。通りの向こう側にも仏具屋があった。父は少年時代

よく本願寺の屋根の棟までよじ登って遊んだらしい。私自身も、大人でも歩けるような高さの縁の下で遊んだ覚えがある。祖父の店にはいろいろな真鍮の仏具が壇の上にずらりと陳列され、背後には天井まで届く大きな仏壇の列、店の前には釣鐘がいくつか並んでいた。得意先は主に市内の寺々で、私は中学時代毎月一、二回、祖父のために自転車で「掛取り」(集金)に回った。祖父母は「内孫」の私を特にかわいがってくれた。しかし私の父は祖父の家業を継ぐことはしなかった。これを語るのが私の主な目的である。

父が学問を志し作家になろうとしたのはどんな刺激によるものであったかわからない。彼が七〇歳を超えたときに書いた「倒してきたハードル」という題の自伝的なエッセイ集にも、少年時代に特にだれの感化を受けたということは記していない。ただ私の子供の頃には、祖父祖母はいかに理解がなくて、「学問は商売の邪魔になる」としか言わなかったということだけは何度も聞かされた。父には六人の弟や妹があつたが、誰も仏壇屋のような将来のない商売を継ごうとはしなかったのは当然かもしれない。祖母が吝を騙すのをしよつちゅう見ていた父は、金を儲けることを嫌悪した。何よりも町の人たちの偽善を憎むようになった。



卒業生特別受賞者
(1914・大正3年3月)

右、安田嘉一 中、宮崎周二 左、南部吉郎

た。坊主たちを一生目の仇にし、死んでもうちの寺には葬ってくれるなど、彼の弟と喧嘩をしたこともあった。

それはともかく、父は学校では成績優秀だったらしい。画の才能もあった。しかし健康の問題で青少年時代に悩んだのは大きなハンディキャップであった。福井中学に三年まで行ったが、肺結核のため退学、金沢の病院に入院した。こんな事情で自転車に乗ることも習わなかったと述懐している。一年病院で保養したあと、父は立命館中学に補欠入学、知り合いの家に下宿して、残る二年を終業することになる。そのとき彼はもう二一歳になっていた。父の自伝には、立命館時代のことはほとんど触れていない。ただ私はよく小笠原秀実という名を聞かされた。表題は覚えていないが、父の書齋には彼から贈られた著書もあった。しかしその頃は父の過去についてそれほど好奇心もなく、父も自ら語ろうとはしなかった。ところが図らずも今回、立命館の方々のご努力によってその詳細が判明してきたのである。そこで私はいただいた資料を基にして話を進めることにする。

父は立命館中学に二年間、一九一二年〜一九一四年の間在学した。それはちょうど明治から大正への転換期だった。卒業のときは、八二人のうち六人の優等生の一人で、家にそのときもらった置時計があったのを覚えている。中学の同窓会誌「清和」に父が書いたものがある。伊勢神宮に修学旅行したときの記録で、第二日目を分担したらしい。適当に抜粋してみる…、

… 茶話会の熱狂のあと、宿屋で目を醒ますと、たった一つの電燈の光がさびしく細い金色の輪になって暗がりに溶け込ん

でいる。周りには萌黄縞の布団にくるまって、五〇人ばかりの灰色の頭がうごめき、時には笑ったり喚いたりしている。まだ宴会の歓楽を夢見ているのだろうか。その一人が起き上がる。瞬間に朝日が差し込んで、赤、青、紫の塵が渦巻く。セザンヌの「夜のカフェ」を想い出す。…私はAと二見が浦の巖頭に立ったが、雲のかげんで、水平線に上がる日の出は見られない。しかし螺鈿の波の散らばった渚を歩いていると、二人の敬虔そうな老婆が、障壁にもたれて佇んでいるのに出会う。まるで中世期の西洋の名画のようだ。…

このエッセイはまことに父らしい。すでにその性格をはっきり表している。彼の関心は、伊勢神宮よりも、具体的な自然よりも、むしろ刹那刹那の印象の俳句的な描写に向けられている。すべてが暗示的である。

さて話をもどして、小笠原秀実とはどんな人だったのか？これに関して立命館から提供された資料のほかに、シカゴ大学図書館でもいくつか見つけることができた。「民間学辞書」(編集 鹿野正直ほか、三省堂出版 一九九七)によれば次のようである…

おがさわら ひでみ・小笠原秀実、一八八五〜一九五八 美学者、哲学者、詩人、アナキスト。「形あるすべてを棄て」、「変わり行くすべてを忘れ」、「空の心」を生きた、仏教的アナキストとして知られる。実弟はハンセン病の研究・治療で知られる小笠原登。愛知県の寺の出身。真宗京都中学を卒業、一九〇三年早稲田予科に入学し、幸徳秋水と出会う。一九〇四年第四高等学校に入学、西田幾太郎に学ぶ。西田の勧めで京都大学に進み美学を専攻、そののち仏教大学、花園大学などの教授を務める。戦後京都でアナキストの同志とともに「民主解放同盟」を結成する。彼のいうアナキズムとは、自立した個人が、いっさいの執着、

拘束、迷信からの自由のもとに真理を探究しつづけることであつた。著書は「純粹美学原論」「禪文化の体系」「民主開放宣言」「近代史の思想的考察」など多数。：

私は大学図書館にある著書、「聖徳太子の国家統制」、「万葉集の思弁学的考察」、「禪文化の体系」の三つに目を通して見た。彼は父が在学した頃立命館で英語の教師として教鞭をとつていた。一九二二（大正元）年二月発行の同窓会誌「清和」第二号にも論説を寄稿している。「自己」と題して彼曰く、「汝に帰れ。汝が汝自身をすてて汝を圍繞する群集の蛙鳴に雷同している間は、汝は決して真の人間ではない。…。」。私自身も、（旧制）高等学校時代に絶えず聞いたのと同じ懐かしいスローガンだ。立命館からもうひとつ、秀実の薫陶を受けた八木康敏という人の著書「小笠原秀実・登」の抜粋を送つていただいた。これには、一九世紀から二〇世紀にかけて全世界を荒れ回つた思想的、社会的な嵐にさらされ、一九三〇〜一九四〇年代の日本の軍国主義、超国家主義にも身を曲げずに生きた彼の生涯が詳しく分析されている。

しかし彼がまさにこの暗黒時代に書いた右の三冊からは、その思想に過激なところは何も感じられない。あるいは古代を探索することで陰に現代を批判しているのかもしれない。これが仏教的アナキズムと云ふべきものであろうか。ともかく彼は複雑な性格の持ち主、矛盾のある、あるいは矛盾を愛する人だつたようだ。また確かに学生にインスピレーションを与える先生だつたに違いない。父とその恩師との間に類似点が多いことに気がつく。父も複雑で、いろんな矛盾やコンプレックスを持っていた。父自身、「仏壇屋の倅がこんな人間になつたのは奇跡だね」といつもわれわれに述べた。きっと二人は意気が合つたことであらう。そこで最後に父のその後を語つて筆を措くことにする。

父は福井に戻ったが、そこには留まらず、両親に逆らい、東京に出て作家になろうとした。「吉郎、生来家業ヲ嫌い、文学ヲ好ム。ヨツテココニ糜爛を認ム、云々」という文書を見たことがある。父は早稲田大学の英文科に入学した。当時そこは、坪内逍遙に始まり、島村抱月、正宗白鳥、田山花袋などがたむろしていた「早稲田文学」で有名な時代であった。父は二、三人の有名な先生と親しくなつたらしい。卒業論文は彼にふさわしく、神秘主義の詩人で画家 William Blake についてだつた。(父の蔵書の中に Blake に関する本が一冊あつて、その中の異様な彫版画が印象的だつた。)卒業後父は東京で就職、東北出身の母と結婚して、私が生まれた。しかし健康問題が絶えず彼を悩まし、職を転々したり、湘南で保養せねばならなかつたりした。その上不幸にして一九二三年例の関東大震災に見舞われる。すべてを失つた彼は、やむなく故郷に帰り、女学校の英語の教師になる。私はそこで育つ。妹たちが生まれる。やつと順調な生活が始まる。病弱の若いときとは違つて父は健脚で、私や従兄弟たちをよく山登りに連れ出した。水泳、テニスも得意だつた。

しかし、いったん両親と故郷を捨てた父にとつて、再び故郷に戻つての生活は易しいものではなかつたと思う。父が精神的な意味で既に「よそもの」であつたとすれば、母は二重のよそものだつた。現在からは想像できにくいだろうが、戦後三〇年経つた頃でも、福井と東京との差は東京とアメリカの差ほどあると私が感じたのを覚えてゐる。特にあの国粹主義、軍国主義一点張りの時期には父は自分の気持ちをおくびにも出せなかつただろう。彼の書齋には日本語でも英語でも、文学、哲学、医学などにわたつていろいろな書物があつた。作家は人間のあらゆる活動について知識をもたねばならない、といつても言つてゐた。私は幼い頃には科学の本を与えてもらい、中学に入るとその書齋に机を並べるようになった。蔵書の中にはマルクシ

ズム全集など「危険な」ものもあった。鮮やかな赤色の表紙で、中を開けると検閲で削除された空白の部分があちらこちら散らばっていた。(世界文学全集の中の小説で、ペケペケで埋まった個所が特に興味をそそつたのも事実だが。)やがて父は危険な赤い本を全部隠してしまった。

戦争がやってきた。私は大学に進み物理学を専攻したが、陸軍に動員され、宝塚の付近で勤務していた。その終わりに近い頃、福井は一晩で全焼し、父の一家は再びすべてを失った。私の祖父母、叔父、叔母の四人は焼死した。間もなく福井は地震と洪水にまで襲われた。父たちは数年間、農家に同居させてもらったり、別の町の牧師館を提供してもらったりしてなんとか過ごした。しかし定年に近くなって校長の職の申し出があっても断って退職し、家庭教師などをしてなんとか暮らしていた。小説を書きたいからだと言ったが、結局何も書かないで終った。何か心理的な壁があったのかどうかはわからない。彼は清濁を平気で併せ呑む人ではなかった。職務上自分の良心と妥協せねばならないような羽目になることを恐れたのもあろう。エッセイの中の一文はそれを暗示している、「私は白い手袋を嵌めなければならないような職には絶対に就きたくない」と。

父は九一歳まで生きたが、ある日散歩の途中脚の骨を折ったのがもとで、最後の五年は床の中だった。母もその打撃から病床に臥し、彼らの世話に妹が大変な苦勞をした。私はとくにアメリカに移住していた。たまに私が訪れると、父は「お釈迦ほど偉い者はない。キリスト教よりも何よりも仏教が最高の宗教だね」と告白するのだった。自分の純粋を護って世俗と戦ってきた父も、最期には世俗とも自分自身とも和解しようだ。彼の両親はよい人だったと書いてある。

この稿は立命館大学の方々、特に理工学部教授中山康之、百年史編纂室伊藤昇両氏のご援助と励ましによることを申し添えて感謝の念を表したい。

二〇〇五年九月一五日

(シカゴ大学名誉教授)